

平成 27 年度長崎大学がんプロ養成基盤推進プラン離島・僻地医療実習

実習生：和田英雄

実習先：国民健康保険 平戸市民病院 指導医：中桶了太 医師

実習期間：平成 28 年 2 月 1 日(月)～2 月 26 日(金)

実習報告：

日本社会の高齢化が年々進み、医師の偏在化や地域社会における医療過疎が叫ばれる時代、地域医療の重要性は一層高まっております。地形的に離島や僻地が多い長崎県の地域医療の実情を肌で感じたいと思い、この度、私は長崎大学がんプロの離島・僻地医療実習を平戸市民病院で行いました。

1 月 31 日、長崎市より 80km 北北西、佐世保市より 25 km 北西、平戸市中部に位置する平戸市民病院を目指して昼前に長崎市をバスで出発し、その後 2 度乗り継ぎ片道 4 時間半をかけて病院に到着しました。

平戸市民病院には押淵院長以下 9 人のベテラン常勤医がおられ、診療科は内科、外科、整形外科、救急科、小児科、眼科、リハビリテーション科を標榜しています。診療は 1 次～2 次救急まで対応し、平戸市中部・南部地区には開業医が 1 件しかないので、開業医としての役割が大きいようです。

本題である実習は指導医の中桶医師に最初の 1 週間はプランを準備して頂き、以後は自分で計画しました。

はじめに勤務歴 30 年の押淵院長とリハビリ科長から平戸市民病院の歴史を伺い、リハビリテーションや訪問診療の概念が定着していない時代に県内で最初に開始したことや、予防医学にも注力し検診の普及活動に長く取り組んで普及率を県内トップレベルに押し上げたことを知り、地域医療に貢献し続ける情熱と行動力に感銘を受けました。

その後、訪問診療、訪問看護、訪問リハビリに同伴させて頂き、身体的理由で病院まで通えない患者のお宅に病院車で伺いました。道中で奥深い山の中や強風吹きすさぶ海岸沿いに集落を見かけましたが、足腰の悪い高齢者だと夜間に急病で病院を受診するのは結構難儀なことではないかと思いました。

また上部消化管内視鏡検査、腹部エコー検査をさせて頂き、4 月から臨床診療に復帰する前の良いトレーニングになりました。内科・外科の外来診察にも見学させて頂き、当直診療は 4 回(平日 3 回、休日 1 回)行いました。インフルエンザなどの **Common disease** のほかにも特発性門脈血栓症といったこれまでに経験したことのない疾患や遭遇頻度の低い疾患がみられたので刺激的でした。入院患者も主治医として 2 例受け持ちました。数としては少ないですが、1 名は発症がはっきりしない硬膜下血腫の患者で、これまでなら診断後速やかに他院に紹介していた脳外科疾患でした。その症例も診断時に脳外ホットラインを使用し某病院に転送を依頼しましたが、結果的に断られたために主治医となる以外に選択肢がなく診療することになりました。幸い神経症状の出現も、血腫の増大もなく病状は安定

していました。すると今度は「血腫除去は必要ないのか」「いつ頃退院して大丈夫なのか」、「退院後はどんなフォローが必要なのか」と、新たな疑問が湧いてきました。専門外診療なので悩みは尽きません。結局他院の脳神経外科医に電子メールを介して相談し、解答を頂いてからは退院後のフォローの手筈まで整えて無事に退院させましたが、色々な意味で思い出に残る1例になりました。

実習を振り返り、『『地域医療の実情』とはどのようなものか』について考察しました。実習中は訪問医療（診療、看護、リハビリ）のインパクトが大きかったのでこれらを頑張っていることがその答えなのかと思っていましたが、今はそうではないと思っています。なぜなら病院に通えない患者の存在は離島・僻地に限ったわけではありませんし、訪問診療、看護、リハビリは都会にも存在するからです。

むしろ前述した例のように、規模としては決して大きくない病院に勤務する医師が近くに頼れる病院（開業医、同等 or 高次レベルの病院）がない中で、専門外の疾患のことまでストレスやリスクを負いつつ診療せざるを得ない（逆を言えば患者にとっても専門外の医師に命を預けている）環境のことではないかと思考しました。

長崎市や地方の中～大規模の病院に勤務していると幅広い診療科が揃っており、たとえ当該診療科がない場合でも近くの病院に容易に紹介できることが多いので、専門外診療をする経験は滅多にありませんでした。このことは医師に限らず患者にとっても本当に恵まれた環境なのだとは強く認識しました。

また医師不足からくる当直回数の多さも気になりました。体力が続く間は問題ないのですが、誰か一人でも欠員が出た場合には残った先生方の負担が飛躍的に増す事態に陥るのは容易に想像されました。平戸市民病院の体制的な問題に対しては、当然ながら解決策を長年模索（長崎県や大学病院へのアピールを継続）し、打開策（初期研修医や長崎大学がんプロの地域実習生の受け入れ）も打ち出しているようですが、残念ながら即効性はないようです。

そういった地域医療の厳しい一面を実感した一方で、医師個人と地域住民との結びつきの強さも感じました。平戸市民病院の先生方は本当によく患者の名前と顔を記憶されておりましたし、患者によって家族構成まで詳しく把握されていました。治療を行う上でも、疾患だけにとどまらず患者を取り巻く生活環境（住宅環境、家族関係）にまで考慮した対応をされており、印象に残りました。

はじめは長く感じられた実習も過ぎてみるとあっという間の1カ月間でした。実習全体の感想としては、本分である地域医療の実情を体験した以外にも、ヒラメや平戸牛をお腹いっぱい食べたり、平戸観光できたりと、総じて楽しかったです。

今回お世話になった平戸市民病院の皆様と実習を企画・運営して頂いた長崎大学大学院がんプロの関係者の皆様に心から御礼申し上げます。本当にありがとうございました。



指導医の中桶先生と医局前で



ひらめ祭りが開催されていました。格安料金でお腹いっぱい食べました



実習報告会にて